

カスパロフの頭脳

東 典 幸

チェスの高段者の頭脳というのは信じがたいもので、たとえば、一九三七年、コルタノウスキーという棋士は、三十四人の相手と同時に、しかも自分は目隠しをして対局し、

「見たところ張りつめた感じもなく」(一)、二十四勝十引き分けの成績を残した。彼はこのエピソードでだけ名を残している程度の棋士であり、つまり、記憶力がすぐれている者が強豪であるとは限らない。しかし、並はずれた記憶力を持たぬ者がチャンピオンになることもないようである。一九六〇年に王座に就いたタルは、子供の頃、学校から帰って、親から「今日は何を習ったの」と聞かれると、「一語一語」(二)、先生の言葉を繰り返してみせたのだそうだ。この種の話をしてるとき

りがなが、もうひとつ、十九世紀末を代表する棋士ビルスバリーの例をあげておく。たぶん、心理学の実験に協力した折のことだと思ふのだが、次のような単語のリストを暗記させられた。「炎症、骨膜、タカジアスターゼ、血漿複合蛋白質、アンブロージア(神の食物)、連鎖状細菌、葡萄状球菌、小球菌、マラリア病原虫、ミシシッピー、自由(ただしドイツ語で)、フィラデルフィア、シンシナティ、陸上競技、不戦、アメリカ人、ロシア人、哲学、……」等全部で三十ほど。これを彼は数分で覚えてしまい、「与えられた順序で読み上げ、それから逆の順序で繰り返した。リストを次の日に思い出すこともできた」(三)。過去の実戦例を記憶して対局に臨

むことができればそれだけ有利であるのは言うまでもない。何より、記憶力が弱いと、ついでさきまで考えていた内容に確信がなくなってしまうので、同じことを何度も考え直すはめになるのである。コトフの名著『巨匠のように考えろ』(四)には、「同じことを二度考えるな」という貴重なアドバイスがあつて、まったく同感なのだが、私には、今考えていることとさっき考えたこととの見分けが付かないので悔し涙が出てくる。一瞬にして何千通りもの局面を分析するという彼らの計算速度はよく称賛されるが、それは記憶力によつても支えられる必要があるはずだ。

しかし、IBMが七年がかりで開発したチェス・コンピューター「ディーブ・ブルー」

は三分間に五百億の局面を評価するというのだから、名棋士たちの武勇伝も立場がなくなってしまう。今年（一九九六）、世界チャンピオンで統計学的には史上最も強い棋士カスパロフがこれと対戦した。結果は三勝一敗三引き分けでカスパロフの勝ち。人間が勝った、と考えると何やら私も勝てそうで、まんざらでもないが、カスパロフが一敗したというのはたいへんな事件なのである。ちなみに、一九九三年に行われた前々回のタイトルマッチでは、最初の九試合だけで五勝〇敗四引分け、挑戦者は叩き潰された。昨年行われた前回のマッチも大差になり、戦意喪失した挑戦者は無気力な引き分けを連発して、ファンを憤慨させた。だから、この機械の成績は敢闘賞ものなのだ。しかも、対戦後のインタビュ（5）で、カスパロフは自分以上のコンピュータが登場する可能性を否定しなかった。チェス棋士には理系のインテリが多く、元チャンピオンなどが開発に加わっていたことがこれほどの機械を早期に生んだのかもしれない。このインタビュでもおもしろかったのは、将棋に関する質問にもカスパロフが答えていることである。彼は、将棋の特質から見て、人間に対しては「どんなスパコンを開発して

も簡単には勝てないだろう」と言う。問題はその「特質」なのだが、「チェスも将棋もインドが起源だが、その後、西洋に伝わっていきつれてロジック性の強いチェスになり、東洋は中国から日本に渡って非合理性の強い将棋となった」と述べている。「非合理的」とはどう言うことだろう。たぶん、将棋は最後まで駒数が減らないから、いつになっても先が読めないということだろう。よく、「将棋の方がおもしろいゲームだ」と言う説の根拠になる考え方であるが、「非合理的」を、もし「非理性的」と訳せるならおもしろいと思う。チェスは安易に戦うと戦力が消耗して引き分けになるので、志の高い棋士は互いにゲームの流れを積極的に作ってゆく必要がある。名局ともなると、相反する二人の強い意志が止揚され、半分本気で言うのだが、局面にヘーゲルの理性とでも言うべきものが現れた感じになり、それが序盤から終盤への「発展段階」を支配して勝敗が決定される。それに較べればだが、将棋は、特殊なルールに触れないかぎり、適当に駒を動かしていれば何となく勝敗が決まってゆくゲームに思える。言うまでもなく、このような「非理性的な」ゲームはおもしろくない。将棋がおもしろい

のはルールによるのではなく、つまらない戦いを見せてはならない、と考えるプロ高段者のモラルの高さによるのだろう。ルールがゲームの「良さ」と無縁なのは選挙法改正の虚しさを見てわかる。

(1) The Oxford Companion To Chess; Oxford University Press, 1984

(2) L. Barden; Play Better Chess, 1980, Octopus Books Limited

(3) 同

(4) Think Like a Grand Master; Batsford, 1971

(5) 読売新聞、平八・二・一九